

### 3 江戸上水の移り変わり

慶長8（1603）年、徳川家康は江戸に幕府を開き、天下の城下町としての江戸の町づくりが諸大名の手によって開始されます。

この頃、小石川上水が拡充・整備され新市街地へ給水されたと考えられています。また、赤坂の溜池を水源とする溜池上水も江戸の西南部に給水されていました。

江戸の町づくり及び城づくりは3代将軍家光の時代(元和9(1623)年～慶安4(1651)年)に完成します。

天守閣に金の<sup>しゃちほこ</sup>鯨が輝く江戸城の周辺には、豪華な大名屋敷が建ち並び、日本橋・京橋・新橋方面の下町も大いに賑わいをみせます。

井ノ頭池を源とする神田川の水を、関口村（現在の文京区）に築いた大洗堰でせき上げた後、水戸藩邸（現在の後樂園一帯）まで開削路で導水し、神田川を懸樋<sup>かけひ</sup>で渡して、神田・日本橋方面に給水するという神田上水が、江戸の町づくりと軌を一にして、完成したものとみられています。

しばらくの間、神田上水と溜池上水が江戸の暮らしを支えますが、江戸の発展は著しく、人口も増加の一途をたどり、中小規模の2上水では増大する水需要に応じることができなくなりました。

承応元（1652）年、幕府は多摩川の水を江戸に引き入れる壮大な計画を立て、町人の庄右衛門、清右衛門兄弟の提出した設計書の検討及び実地踏査の結果、工事請負人を庄右衛門、清右衛門兄弟に決定し、総奉行に老中松平伊豆守信綱、水道奉行に伊奈半十郎忠治（没後は半左衛門忠克）を命じました。

承応2（1653）年4月4日着工、11月15日羽村取水口から四谷大木戸までを白堀でわずか8か月(この年は閏年で6月が2度あるため8か月となる)で掘り上げました。

羽村から四谷大木戸までは約43キロメートル、標高差はわずか約92メートルの緩勾

配を、羽村からいくつかの段丘を這い上がるようにして武蔵野台地のりょう線に至り、そこから尾根筋を巧みに引き回して四谷大木戸まで到達する自然流下方式による導水路で、工事には多くの労力が費やされたと思われます。

承応3（1654）年6月には虎ノ門まで地下に石樋・木樋による配水管を付設し、江戸城をはじめ、四谷、麴町、赤坂の台地や芝、京橋方面に至る市内の南西部一帯に給水しました。

玉川上水開設から3年後の明暦3（1657）年、江戸の町は火災（明暦の大火。俗に振袖火事）により大半を焼失してしまいます。このとき江戸城天守閣も焼け落ちてしまいました。

幕府は、この災害を契機として大幅な復興再開発を行い、江戸はさらに周辺部へ拡大発展します。

拡大した江戸周辺地域に給水するため、万治・寛文年間（1658～1672年）に亀有（本所）上水、青山上水、三田上水が相次いで開設され、元禄9（1696）年には千川上水が開設されます。

亀有上水は中川を水源とし、他の3上水はいずれも玉川上水を分水して水源としました。亀有上水は本所・深川方面に、青山上水は麻布・六本木・飯倉方面に、三田上水は三田・芝方面に、千川上水は本郷・浅草方面にそれぞれ給水されました。このように、元禄から享保にかけて6系統の上水が江戸の町を潤していました。

ところが、8代将軍吉宗の時代の享保7（1722）年に亀有・青山・三田・千川の4上水が突然廃止されてしまいます。これは当時の儒官、室鳩巢の「江戸の大火は地脈を分断する水道が原因であり、したがって上水は、やむを得ない所を除き廃止すべきである」という提言が採用されたものであるといわれています。また、上水を廃止しても、堀削技術の向上によって堀井戸から清浄な水が得られるようになったことや、水道維持の困難性なども理由の一つに挙げられていますが、幕府直轄領である武蔵野の新田の田用水

への配慮から、4上水を廃止したのではないかという説も今日では有力となっています。

こうして江戸時代の後半は、神田上水と玉川上水が100万都市江戸の人々の暮らしの基盤となり、この2上水が江戸から明治へと流れ続けていきます。